



聞き書き甲子園



日本は、森の国。
面積の約7割は、森林がおおっています。



日本は、島の国。
その連なりは、南北およそ3,500キロ。
周囲を海に囲まれています。

地域ごとに異なる気候や風土。
文化、そして暮らし。
そんな日本の各地を旅してみませんか。



聞き書き甲子園は、
高校生が、日本のさまざまな地域で暮らす
森・川・海の名人を訪ね、
一対一で「聞き書き」するプロジェクトです。

名人の職業は、^{きこり}樵や炭焼き、木工職人、
漁師、海女など、さまざま。



高校生は、名人が大切にしてきた、
自然とともに生きる知恵や技術、そして心を
ていねいに聞いていきます。

そこには、これからの持続可能な社会をつくる
ヒントがあるのかもしれません。



聞き書き甲子園とは

「聞き書き甲子園」は、農林水産省の関連団体より選定・表彰される森・川・海の「名人」を全国の高校生が訪ね、「聞き書き」する活動として、平成十四年度にスタートしましたが、本年度より、高校生の受け入れと名人の推薦に協力していただける市町村（地域）を公募し、各地域が推薦する複数の「名人」を、高校生が一对一で「聞き書き」する形で実施しています。

「聞き書き」の基本は、一对一のコミュニケーションです。高校生は、「名人」との対話をすべて録音し、その言葉を一言一句、書き起こし、「名人」の言葉だけを使い、方言など、その語り口を生かして作品にまとめていきます。

高校生は、「聞き書き」を通して「名人」の知恵や技（わざ）、そして、その



生きざま（人生）を受け止めます。「森が泣いている」「村が寂しくなった」と語る「名人」の思いに少しでも応えたいと、里山里海の保全や地域活性化に取り組み卒業生の活動も生まれました。

「聞き書き」は祖父母の世代から孫の世代へと、生きる知恵や心をつなぐ活動です。コミュニケーション教育やESD（持続可能な開発のための教育）の事例としても高く評価されています。

もともとこの活動は、平成十四年に林野庁と文部科学省による事業として始まりしました。当時、林野庁では、きこりや造林手、炭焼き、木地師など、森を守り、育て、その恵みを生かす知恵や技術を持つ人を「森の名手・名人」として選定・表彰する制度を立ち上げようとしていました。その検討を行う委員会は、民間の有識者によって構成されていましたが、その委員の一人であった作家の塩野米松氏から、「ただ表彰するだけではもったいない。その知恵や技術を記録に残すために高校生による『聞き書き』を行ってはどうか」という提案がありました。

塩野氏は、この活動のベースとなる、ヒントをお持ちでした。それは米国の「OXFORD」という取組です。一九六六年、米国・ジョージア州で、一人の高校教師がアパラチア山麓に暮らすお年寄りのもとへ生徒たちを通わせ、家の

建て方や薬草の採り方など、暮らしの中の知恵や技術を取材し、レポートにまとめさせたのです。その記録は後に出版され、大きな反響を呼びます。「OXFORD」とは、直訳すると「きつね火」ですが、同地域では「自然」という教師が人間に与え続ける知恵の象徴という意味もあるといいます。

自然とともに生きてきた人間の知恵や技術、そこで育まれてきた心を、日本でも記録にとどめようと、当時の林野庁担当者は、文部科学省と話し合い、「第一回森の聞き書き甲子園」を実現しました。

現在、「聞き書き甲子園」は、農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、NPO法人共存の森ネットワークで構成する「聞き書き甲子園実行委員会」が主催し、(株)ファミリマートの「夢の掛け橋募金」をはじめ、複数の企業・団体からの協賛・助成・協力により運営しています。

高校生が聞き書きした作品は、年度ごとに冊子にまとめ、関係各所に配布するとともに、インターネット上の「聞き書き電子図書館」に集積し、検索・閲覧に供しています。また、平成二十三年には長編ドキュメンタリー映画「森聞き」も制作され、現在も全国各地で上映会が開催されています。



お問合せ先
(書籍・電子図書館)
共存の森ネットワーク
contact@kikigaki.net
(映画)プロダクション・エイシア
morkiki@asia-documentary.com





2019年度の受け入れ地域



第十八回 「聞き書き甲子園」の概要

第十八回目の実施となる「聞き書き甲子園」は、五月中旬から参加高校生の募集を開始し、八月には、全国から選ばれた八十名の高校生たちが東京都内に集まり、三泊四日の事前研修会によりインタビューやテープ起こし、写真撮影の仕方など「聞き書き」に必要な手法を学びました。

その後、高校生たちは、事前研修会で学んだことを踏まえ、八月下旬から十二月の間に原則として二回、受け入れ地域の「森・川・海の名人」の仕事場を訪ね、初めて見聞きする名人の知恵や技、生き方などについて、名人へのインタビューを行いました。高校生

は、名人との対話をボイスレコーダーなどに全て録音し、膨大な音声データを一字一句書き起こし、名人の語り口(方言など)を損なわない形で編集し、名人の技や生きざま(人生)が読み手に伝わるよう構成等を工夫して、十二月中旬までに五千字程度の「聞き書き」作品を仕上げました。

年度末の三月三十一日には、「聞き書き甲子園」の成果発表の場として、東

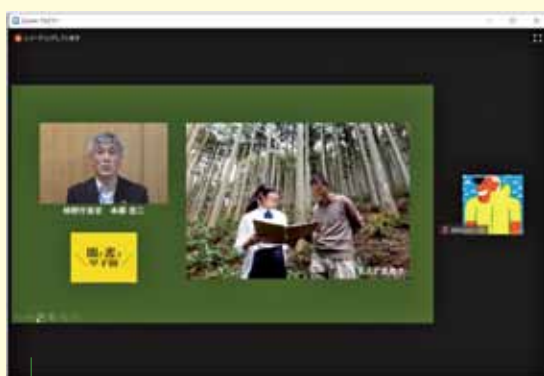
聞き書き甲子園の1年



京都庁都民ホールにおいて「第十八回聞き書き甲子園フォーラム」の開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、開催日を六月十三日に延期するとともに、オンラインでの開催に変更しました。オンラインフォーラムでは、高校生の「聞き書き」に協力いただいた全国十二地域(市町村や地域団体)の紹介や、高校生が、作家の塩野米松氏及びエッセイストの阿川佐和子氏を聞き手に迎え、聞き書きの体験や取材時のエピソードに関する対談を行いました。

今回、はじめてのオンライン開催となりましたが、会場で開催していた時に比べるとより多くの方に参加いただけたことや、高校生が地元でフォーラムに参加できたことは、「聞き書き甲子園」の効果的な普及方法の発見につながりました。

※聞き書き甲子園の協力市町村(地域)公募については、こちらをご覧ください。
(<https://www.kikigaki.net/join>)



林野庁長官からのビデオメッセージ



事前研修会に集まった80人の高校生

農林水産大臣賞

タイトル… 動物と共存できる未来へ
 高校生… 里崎光 (長崎県立平戸高校2年)
 名 人… 河田紀美江 (山口県下関市)

私は最初から山の勉強、森づくりの勉強をして嫁いできたわけやない。だから爺ちゃんと山に行つて、爺ちゃんの言う通りにスギとヒノキばかり植えてたね。それからいろいろ書物を読んだり、苗木を作ること覚えた。そして誰よりも先にカヤの木を買ってきて植えようとしたわけよ。「これからの先の森づくりは山の木をいっぱい売らんやなくて、二、三本売ったら一年の生活費があるような森づくりをするんよ」って言ったんよ。

(サカキとかシバはもう三十年くらい前かな。私が考えたんは、ちよっと植えたんじゃ駄目。植える量を増やすんよ。ポット苗は植えたら百%っていてもええぐらい木が枯れずに育つ。他の苗やったら三割ぐらいは枯れるかな。でも上手く雨が降ってくれにやあね。山だつて右から左に儲かるもんじゃないんよ。

あとは全ての動物と共存せにやならん。でもそれはやっぱり大変なことよね。鹿、タヌキ、ウサギ、猿、イノシシとかの動物と、どのくらい共存できるのかはわからない。でも植林をしす

ぎたから動物の食べるものが無くなつたとは一概には言えんと思う。そりや確かに奥山の方まで植林するのは水害が起きたりもするし良くないと思う。水害はその時の雨量、土質、いろいろなことが重なって起きるんよ。そういうことを考えたら山の上まで植林するのはよそ。山桜でもええし、なんでもええから山の上の方に実をいっぱいつける木を植えといたら、動物が里に出てくるのは、少しは変わらと思う。人間も欲と二人連れやからやつてしまふんよね。もう少し知恵を働かさなにいけん。人間が自分ばかりのこと考えてもなかなか良いことない。



サカキの出荷

林野庁長官賞

タイトル… 紙漉き屋さんを思いやり、良い楮を作るんだ
 高校生… 遠藤愛斗 (岩手県立盛岡農業高校1年)
 名 人… 齋藤邦彦 (茨城県大子町)

楮はクワ科で、十二月頃になると全部の葉っぱが落ちる木なんだ。私や大子町を含めて育てているのは大子那須楮。和紙の原料なんだけど、楮の木は幹の皮の繊維を使うんだよ。収穫した楮を蒸して柔らかくした後、一本一本幹の皮を手作業で剥ぐ。そうして剥がした皮が硬くならないよう、今度は一晩水に浸して、黒い皮や甘皮っていう緑色の皮がついてるのを、小包丁で剥いで白くするんだ。私の仕事としてはこの表皮取りの作業が一番手間かかるかな。

岐阜県的美濃和紙や福井県の越前奉書紙は私の楮使ってるんだよ。美濃和紙や越前奉書紙は文化財の修復とか高級な絵とか、書物、木版画とか掛け軸とか障子紙にも使われるんだよ。私の楮は世界にも和紙として送っていて、東京オリピックの表彰状の和紙の原料の楮は九十五%以上うちの楮を使って、美濃の紙漉き屋さんが和紙を漉いてるんだ。

うちの楮の量は少ないけど、品質は日本一の自信がある。本美濃和紙とかの良い和紙のための楮を頑張って栽培

して、加工して使われるってことはやりがいだね。

目標は楮農家や加工する人が絶えず、いてくれることかな。あとは楮農家と加工の収入が安定して、紙漉き屋さんとの取引ができて楮農家を続ける人が安心して生活できるような仕組みをつくりたいと思うてるよ。そして続ける人が出てきてくれるとうれしいね。楮農家も紙漉き屋さんもお互いの状況を見たり、体験しながらお互いを尊重することが大事だと思うんだ。



楮の芽かきをする名人



「KIKIGAKI」 を世界の共通語に

インドネシアは、豊かな生物多様性を有する熱帯林保有国である一方、国や企業による大規模なプランテーション開発や人口増加により、近年、森林消失が深刻化しています。自然を搾取しすぎることなくバランスをとりながら、持続可能な形で利用する知恵や技術を普及するとともに、次世代への環境教育を普及することも急務となっていました。

そこで、聞き書き甲子園実行委員会事務局のNPO法人共存の森ネットワークは、これまで十年以上にわたって実施している「聞き書き甲子園」のノウハウをインドネシアに移転し、国



平成27年にはマラサリ村で聞き書きを実施

際的な環境教育プログラムとして確立する取組を始めました。

平成二十四年四月には、「聞き書き甲子園」の参加校であった筑波大学付属坂戸高校と姉妹校提携をしていたバゴール農科大学附属コルニタ高校の教員を対象に、まずは「聞き書き」指導者養成研修を開催しました。同年九月には、生徒約四十名がグヌングデパンランゴ国立公園職員のサポートのもと、竹細工の名人などに「聞き書き」を行いました。

一方、筑波大学附属坂戸高校でも、有機農業に取り組む名人などに「聞き書き」を実施し、両国の伝統や文化を比較しながら、将来の暮らしのあり方について発表・交流するプログラムとしました。

本プログラムには、インドネシアの林業環境省や国立公園職員、現地NGOをはじめ、スラウエシ島のパル市からも教員やNGOスタッフが視察に訪れました。後日、パル市などでは、一般社団法人あいあいネットと協働で、四つの高校の生徒と教員を対象に、「聞き書き」研修を実施しました。インドネシアでは、公用語であるインドネシア語以外に、スンダ族はスンダ語、カイリ族はカイリ語など、特に高齢者にとっては民族固有の言語が日常言語であり、高校生にとっては、改めて地域

や民族固有の文化を見つめ直すきっかけにもなりました。

また、平成二十八年三月に開催された「第十四回聞き書き甲子園フォーラム」では、インドネシアにおける聞き書きの実践について、インドネシアの高校生による発表が行われ、その後のワークショップでは日本の高校生と一緒に「私たちがつくる地域の未来」をテーマに意見交換が行われました。

当初、コルニタ高校からはじまったこの取組は、現在では、インドネシアの「KIKIGAKI」として、ジャワ島、スラウエシ島、カリマンタン島各地の高校生・大学生が「聞き書き」を実践しています。



研修に参加したコルニタ高校の生徒たち

「KIKIGAKI」 への期待



NPO法人共存の森
ネットワーク
理事長 渋澤 寿一

私たちは、マネー（お金）を共通言語としながら、合理的な社会をつくってきました。企業はひたすら利益を追求し、消費者となった私たちは、衣食住も暮らしの安心も、すべてお金で買えると錯覚しています。

一方で、名人は、身近な自然とコミュニティによって生かされ、生きてきました。先祖代々、森と向き合い、坦々と働きつづけてきた人生がそこにはあります。高校生は「聞く」ことを通して、名人と自分の心を重ねていきます。人は、敬愛と共感によって繋がるのです。

昨今のアジアは、急激な経済成長により、環境破壊が進み、伝統的なコミュニティや地域固有の言語や文化が失われつつあります。そのときに、自らのアイデンティティを保つ原点は、やはり聞き書きではないかと私は考えています。

アジア各国の聞き書きを通して、私たちは、いまだ気づいていない社会の価値や幸せな生き方を考えるヒントに出会える気がしています。